

# 少 壮 吟 士 候 補 紹 介

3月の「第47回全国少壮吟詠審査コンクール決選大会」にて3回目の入選を果たし、晴れて少壮吟士候補となった3人。所属する各流派の宗家・会長が愛弟子のプロフィールなどを紹介しました。



## 岩永優岳候補

田中岳藤 (日本詩吟学院認可岳鐘会会長)

「長崎からは初めての候補でこれまでの岩永さんの努力、精進に頭が下がる思いです。子供の時から歌が好きでお母さんと一緒に大会に出て優勝するなど積極的に活動していました。平成11年、21歳の時に詩吟をしている大伯父に勧められて入会、上達は早く2、3年でいろんなコンクールに出ておりました。性格は真面目でやる気満々ですので、今後先生方、少壮の諸先輩方にご指導いただき、個性ある詩吟を目指して吟界に少しでも役に立つ少壮になるよう期待しています」



## 関口麗煌候補

森山清明 (清吟堂吟友会島根ブロック名誉会長)

「島根県、鳥取県の山陰地方からは初めての少壮吟士候補であり、我が流派の会員400人も全面的に支援してまいりました。関口さんにとっては大変なプレッシャーだったでしょうが、重圧に負けずに見事候補になり、ほんとうにうれしく思います。私がつねづね言っているのは感謝の気持ちを忘れないということ。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」で天狗にならず、精進してほしいです。出雲弁では「だんだん」と言いますが「ありがとう」の言葉を忘れずに頑張っしてほしいと思います」



## 中野祥理候補

中野富祥 (佳祥流理真吟道会会長)

「中野祥理は私の長女ですが、平成元年、小学校4年生の時に次女とともに詩吟を始めました。高校時代は合唱部の部長として頑張り、地区の詩吟大会では接待係なども行っていましたが、大学進学、就職で約9年間詩吟のコンクールなどから遠ざかっていました。大阪から福岡に転勤になって気持ちも新たに詩吟に取り組み、多くの皆様方のご縁がありまして、念願の少壮吟士候補になることができました。至らぬ点もありますが諸先輩方のご指導ご鞭撻を重ねてお願いしたいと思います」

**8月24日(土)**  
**少壮吟士候補研修会からスタート**

吟詠家にとって憧れであり、模範である少壮吟士。その高い技術に磨きをかけ、少壮吟士としての自覚を高めようという研修会が、今年も晩夏の成田で開催されました。現役少壮吟士45人のうち43人が出席。さらに少壮コンクールで3回入選を果たし、少壮吟士候補となった3人も緊張の中にも晴れがましい面持ちで参加しました。

初日の土曜は13時から、まず少壮吟士候補特別研修会から開催。候補が所属する流派の宗家・会長が、候補の吟歴や人となりを紹介し、アを交えて紹介します。続いて6月から第6代の財団代表となった沼崎富会長が「令和元年度がスタートして2カ月、将来ビジョン会議で8地区を回ってきましたが、広渡英治専務理事が「少壮吟士は財団の至宝、各地区の吟詠研修会るときにはぜひ講師としてご招請していただきたい」と力説。皆様にはこれまでの経験を通して得られたものを吟詠研修会で広くその力を発揮していただきたい」と挨拶しました。「少壮吟士候補者への期待」では八



1日目は夕食後も研修。国技館大会特別企画番組の最後を飾る『令和』を、見事なハーモニーも交えて全員で合吟、収録を行った

文字剛洲副会長が「少壮吟士の看板を背負う皆さんは、つねに初心を忘れず、健康管理を維持して吟界の発展に寄与していただきたい」と激励。続いて青柳副会長が剣詩舞家を代表して「吟詠家は大切なパートナー。『詩は志なり』で詩心を大事にして表現してほしい」。最後に広渡専務理事が「令和に入って役員も9人が新人となりましたが、更に改革を推進していきま」と新体制でも改革路線を推進することを表明しました。

14時からは少壮吟士会の自主運営による「少壮吟士夏季特別研修会」がスタート。少壮吟士候補者から始まった「吟詠演習」では緊張感の中で密度の濃い講習が行われました。

## 1日目 8月24日(土)

### 【令和元年度少壮吟士候補特別研修会(第41期)】

- 国歌斉唱並びに財団会詩合吟
  - 財団常任理事会役員紹介
  - 特別参加の宗家、会長紹介
  - 少壮吟士候補者紹介
  - 財団代表挨拶:沼崎 富会長
  - 少壮吟士候補者への期待
- あ 吟剣詩舞の向上と指導者の役割:八文字剛洲副会長  
い 剣詩舞道家からの期待:青柳芳寿朗副会長  
う 吟剣詩舞道界の現状:広渡英治専務理事

### 【令和元年度少壮吟士夏季特別研修会】

- 少壮吟士からの要望説明:広渡英治専務理事
- 吟詠演習 その1  
[講師:河野正明先生、増田鵬泉先生、横山寿城先生、佐々木一景先生]  
※令和2年度吟詠集吹込予定者は、その吟題を吟詠演習後、別室で吹込み作業
- 吟詠演習 その2 [講師:同上]
- 審査基準についての研修(テープによるモデル吟詠に講師から意見を伺う)
- 国技館大会特別企画番組の説明
- 全国少壮吟士会総会

## 1日目 8月25日(日)

- 吟詠音楽の基礎知識についての提言:尺八演奏家 河野正明先生
- 吟詠演習 その3 [講師:同上]
- 意見交換会
- 研修会閉講式

【日時】令和元年8月24日(土)~25日(日)

【場所】成田東武ホテルエアポート・二階会議場「松柏」

【主催】公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会

# 磨かれる 財団の至宝。

## 令和元年度少壮吟士・同候補夏季吟詠特別研修会

吟詠界の最高峰である少壮吟士。吟の技術だけでなく、立居振舞など品格も求められますが、さらなる高みを目指すための夏季吟詠特別研修会が今年も千葉県成田市で開催されました。今年3月に行われた「全国少壮吟詠家審査コンクール決選大会」で見事3回目の入選を果たした3人は、第41期の少壮吟士の候補者となり、先輩方とともに参加。緊張の中にも充実した2日間を過ごしました。

(少壮吟士候補3人へのインタビューは、10月発売のマガジン「吟と舞9号」に掲載する予定です)



閉講式では岩永優岳少壮吟士候補の先導により『桂林荘雑詠諸生に示す その一』を全員で合吟。「道(ゆ)ふことを休(や)めよ 他郷苦辛多し」と共に学ぶ心を詠った



右:吟詠演習では少壮吟士候補3人の後、吹込みを行う少壮吟士の演習を実施。見事な吟にも4人の講師から高度な指摘が相次いだ  
左上:役員との「意見交換会」で、「渡り」について質問する田村鳳泉少壮吟士。密度の濃いやり取りがなされた  
左下:尺八演奏家・河野正明先生による「吟詠音楽の基礎知識についての提言」では、「中高の音選び」など詳細な内容の講習が行われた

### 8月25日(日) 役員との 意見交換会も実施

2日目の日曜は9時から毎年恒例の尺八演奏家・河野正明先生による「吟詠音楽の基礎知識」についての講習。

「基礎知識」といっても少壮吟士に対する研修なので、内容は高度。「中高の音選びの注意点」や、「5母音から口腔を変化させずに『ン』へ変化」などの説明に、全員熱心にメモを取って聞き入っていました。

「吟詠演習」では少壮吟士候補者3人の後、剣詩舞コンクールの幼年・少年の部と、青年・一般2部の吟題を吹き込む16人がまず指導を受けました。候補者は「ものすごく緊張して少壮コンクールよりもあがつてしまいました」と、居並ぶ講師と先輩方を前にして大苦戦。

吹込予定の少壮吟士はさすがに落ち着き、文句のつけようがないような吟を披露しますが、それでも少しでも完成度の高い音源を作ろうという講師陣からは、容赦のない注文が飛びます。吹込予定の16人の後は期の浅い少壮吟士から演習をすることに なっていましたが、残念

ながらタイムアップ。しかし聴くだけでも大変勉強になるレベルの高い演習となりました。

昼食後は財団役員との「意見交換会」。少壮吟士から出された質問に対し、壇上に並んだ役員が答えるという形式で進行、渡りについてやサイトのデジタル化についてなどの意見が交わされましたが、役員からは「もっと活発に意見を出して欲しかった」との声も上がりました。

閉講式では役員、吟詠専門委員全員で感想を述べ、伊東響峰少壮吟士が代表して謝辞を述べて無事に全日程を終了。少壮吟士としての誇りを新たにするとともに、責任をかみしめて帰路につきました。

閉講式の最後、受講生を代表して伊東響峰少壮吟士が「少壮吟士として一層の精進に努め、今回の研修内容を胸に日々研鑽していく所存です」と謝辞を述べた



## 船川利夫先生の遺志を継いだ3人の講師座談会 充実の吟詠演習を振り返って

少壮吟士夏季特別研修会では毎年「吟詠演習」が行われていますが、4年前に少壮吟士から一人当たりの時間を長くするとともに、船川利夫先生の指導を受けた少壮吟士OBの方からその内容を伝えてもらいたいとの要望がありました。それを受けて平成29年度から、尺八演奏家の河野正明先生に加えて、船川先生の薫陶を受けた増田鵬泉、横山寿城、佐々木一景各少壮吟士OBが講師として吟詠演習を行うことになりました。3人の少壮吟士OBは今回が最後の講師。若手の少壮吟士から「直接指導を受けられなかった船川先生の指導内容がよくわかって非常に有意義でした」と大好評だった3年間の演習を振り返っていただきました。

現役少壮吟士からの要望で、船川利夫先生の指導を受けられた御三方と河野先生の4人に3年にわたって講師をしていただいたわけですが、振り返っていかがですか？



増田 本当にやってよかったですね。船川先生と笹川鎮江先生が亡くなって、船川先生の指導に基づいて習ってきた我々3人が、過去のいろ

んな苦勞も含めてやってきたことを現役少壮吟士の皆さんに提供する。自分らも初めのうちは「私らごときが」という気持ちもありましたが、初年度から皆様方にすごく喜んでいただいて、次もその次もということとで3年間続いた。とくに昨年はテープ録音する方たちが金曜の夜から3日間フル回転でやられて、私も頑張りましたが受講生の方も頑張っていました。

横山 まったく一緒の意見ですが、我々は幸せなことに鎮江先生、船川先生という吟詠界で一番我々が師匠として思っている方から直接指導を

受けてきた。候補を含めた今の若い少壮吟士の方々はこれまで自分の力でずっとやってこられたのは素晴らしいですが、一番肝腎なことは少壮になつたこれが大変だということ。少壮になられる前の段階から脱皮していつてもらわれないと大人にならない。そういう時に我々がその脱皮のお手伝いをさせていただいたわけですが、船川先生から直接ではなく、間接的に教わるということなので、完全に理解するのはむずかしかつたかもしれない。少しでもお役に立つことができたなら幸いです。あとは自分たちの力で自分の殻を破っていくことが大切だと思います。



「詠う」だけでなく「語る」ことが大切

船川先生の教えをそのまま伝えるというのはなかなかむずかしいこととは思いますが、今の少壮吟士の方々に一番伝えたいのはどういうところでしょうか。

**横山** 船川先生の指導で印象に残っていることの一つに、ある歌手の方が吟じていらつしやる『蛾眉山月の歌』をテープで流したことがあるんですが、「いずれ君ら抜かれてしまうよ」とまじり言われて、歌手の方だからきれいだし流れもいい。先生としては我々に発破をかけたかったのでしょうか、私も現役の少壮吟士の方々に同じことを言いたい。しかしそれとともに、吟詠家としては「語り」をしつかりやってほしいと思います。歌手の方は節は非常に上手ですが、語りの部分も「歌う」ことが多い。しかし詩吟の本質は語りの素晴らしさであつて、そのうえ



で節をのせていく。「語って詠う」ということを船川先生も指摘していたのですが、単なる大きな声出して唸っているだけでは人の心を打たない。節にも語りにも強弱があります。そういうものを自分も勉強しないとイケないし、少壮の方々に我々を飛び抜いて勉強して欲しいなと思います。  
**佐々木** 言葉も語つたけど、「さあここから節だ」と勢い込むと節だけ一人歩きする。節というのはほんとに気持ちをぐつと入れたその心の律動でないといけないと思います。そうでないといけない人は「ああこの人はいい声やなあ、上手やなあ」というだけであつて、心に伝わってこない。中身が伝わってこない。語りからつながつた、心の、魂の律動というのが大事やなあと思います。船川先生は言葉、語りの持つ意味、それをどのように表現するかということに大変重点を置かれて、ひとつの言葉の何音節あるなかで、それを大きくしてそれを小さくしたら本当に心が伝わるか。それを

を養わないといけないとおつしやつていました。たとえばアパートに行つたら安物ではなくて名人が作ったような特選コーナーに行きなさい、他の芸術も見てそこに感じる心を作つていきなさいと。そして詩吟こそいろんな表現が可能で、吟ずることによつて表現できたなら人の魂をゆさぶることができるし、こんなすごいものはないなということとはつねづね先生ご自身が思つておられたんだなということを感じます。他のジャンルの愛好者にも詩吟を聴いてもらつことは大事なのですが、迎合するのではなくて、詩吟の大切さという一本の柱をしつかりと持つて、詩吟を広めていってほしいなと思います。

**横山** 私は最初、三橋美智也さんの詩吟、「斯の身飢ゆれば斯の児育たず」という『棄児行』を聴いて「いやあ素晴らしいな、詩吟やつてみようかな」とこの世界に入った。それであく



まで自分の趣味の中でやつていたのですが、今の方は入つた瞬間からコンクールに目標を持つていることが多い。その結果、皆さん上手なだけで、佐々木先生が言われたように個性がなくなつてしまうことにつながつていってしまうと思います。芸道の用語で「守破離」というのがありますが、まずは教わつたことを「守る」ことから入つても、次にはそれを「破る」ことが大切。そして既存の型にとらわれることなく、「離れる」ことで自在になれる。今の少壮吟士の方は高い技術レベルにあるのですから、あとは個性を磨いていくことで殻を破つていってほしいですね。そしてコンクールなどでは2分間、自分だけの時間を持つてるのだから、語りの部分ではたとえば李白になりきつたり、お芝居をしてほしい。お芝居して語つてもらつて、そして節で美しさを出していくとか、そういうものを合致させて自分の特徴をアピールしていったら、またもつと素晴らしい吟が出てくるので

何回も何回もやりました。たとえば「雨が降る」をどう言つたらいいか。節の強弱、大小をとてみやかましく言われた。さらに「それでは明るすぎ。お母さんが死んだつもりになってやりなさい。そうすると音色が変わるから」というようなことも言われて。音色に対して非常に深く考えておられましたね。

**増田** 少壮吟士になつた当時、年10回くらい吟詠研究会がありました。『寒梅』の最初の「庭上の」と詠つたときに船川先生にストップかけられました。まず「言」うるせえ！とおつしやられまして(笑)。「やかましいんだよな、君の吟は」と。私ら声を鍛えて鍛えて大きな声出すのが詩吟だという時代で育つてきて、音楽性より声の鍛え方を軸にやつてきたので、船川先生のおつしやつている意味がわからなくて悩みましたね。だけど習つているうちに、単なる音楽性だけではなかつた「文字」に非常にこだわつて言葉の深い表現を探るといことがわかつてきました。詩吟の詩文は語りで表現するんだから、その言葉が乱雑だつたらなんぼいい声していても、いい吟にならない。そういうことをきちつと言つたうえでの母音のふくら

はないかと思ひます。

**増田** 少壮吟士になろうとする人が減つていて予選を開けていない状況です。少壮コンクールの全体のレベルはたしかに前より下がつているかもしれないませんが、少壮吟士になられた方のレベルは決して下がつていない。ただ残念なのは、少壮吟士になつてからもコンクールを受けるための勉強しかしていかないように思われる方がいらつしやるように感じます。「発音を間違えたらあかん、鮮明にせんとあかん、これはこうせなあかん」という型にはまつた吟をされているということですね。せつかく少壮になれたんだから、あとは競争。その競争の仕方、自分はどういうところを勉強していかないとあかんかと考えないと。先ほど出ました「個性」というのは、結局「遊び心」ということになるのではと思ひます。「演じ心」と言つてもいい。お芝居ならお芝居で、李白だつたら李白の気持ちになつて、中身もひとつの自分の吟を演ずる、そういう気持ちが必要かな。皆さん真面目な方が多いから、逆に真面目すぎて吟が面白くないというきらいがある。昔、森繁久彌さんの舞台上で、ほんの端役で詩吟を詠うということがあつたんです

み、ふくらんだ中での鮮明なこぶしの入れ方とか、呼吸の入れ方、さらには立つ位置や姿勢まで指導していただきました。それらは今回の吟詠演習でも、すべてとはいきませんが折りにふれお伝えしたつもりです。

少壮吟士になつてからが本当のスタート

時代も変わつて少壮吟士の方々の考え方にも変化があるかもしれませんが、最後に現在の少壮吟士に期待したいことをお願いします。

**佐々木** 現在は皆さんの音感も非常によくなつて、レベルは非常に高いと思います。昔は音程的に不安定な部分も多かつたんだけど、そのぶん個性はあつた。今は声もいし音程もしっかりしているけど、個性があまりなく、画的な感じがします。これはやはり「語り」よりも「詠う」ことを主体にしてしまつていのではないかなと。それとアクセント。もちろん標準語のアクセントは大事にしなければならぬけど扱ひ方ですね、幼稚に聞こえたりする部分がある。船川先生は漢詩の中に、いろんな心の面ですね。それから風景、あらゆるものを表現して、「こうと思うから、いろんな感覚

が、森繁さんは他の役者さんにもものすごくアドリブをふるんですよ。それに受け応えられる人じゃないと務まらない。我々もステージに立つて詠うとき、最初は「こんなふうに詠おう」と思つていたのに始まつたら「こうしたほうがいいのでは」と変えることがある。そういうある意味での遊び心というか、演ずる心というか、自分がステージのど真ん中で詠っている、そのど真ん中をみんな見ろよというような気構えがね、もつとあつていんじゃないかと思ひますね。「間違わへんやろか……」というマイナスのことばかり考えていたのではダメ。とにかく少壮吟士になることがゴールではなくて、ここからが「ヨーイ、ドン！」なんです。我々の時代は少壮吟士の人数も多く、先頭集団の人しか名流や武道館で独吟できなかった。いかにして先頭集団にくつついていくか必死でした。そういう厳しきは今やゆるいように思うので、気を引き締めて少壮吟士として自分を高めていってほしいと思います。  
— 今日はお忙しいところ貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。3年間、本当にお疲れ様でした。